

フランス語知覚動詞の補文として用いられる 3つの構文が表す意味の違いについて

金子 真

0. はじめに

フランス語では、何らかの出来事の知覚を表現する場合、動詞の補文の位置に様々な構文が生起し得る。例えば動詞 *voir* を使って「私は彼女が泣いているのを見た。」という内容を表現したいとき、少なくとも次の3つの構文が可能である¹⁾。

- (1) a. Je l'ai vue pleurer.
- b. Je l'ai vue qui pleurait.
- c. J'ai vu qu'elle pleurait.

しかし、全ての環境でこれら3つの構文が交替可能なわけではなく、またどの構文を使うかによって伝えられる意味にもやや違いが生じる。本稿の第1の目的は、様々な環境での各構文の容認度の違いを検討することによって、3つの構文が表す意味の違いを明らかにすることである。従来は、(1)b.にみられるやや特殊な関係節と通常制限用法、非制限用法の関係節との違いについてはしばしば問題にされてきたが、知覚動詞がとる様々な構文を比較しようという観点からの研究はそれほど多いとは言えない。また、そうした観点をとる研究のなかには、(1)a.のような不定詞節(以後INF節と呼ぶ)は完了的、(1)b.のような関係節(以後関係節と呼ぶ)は未完了的な事態をあらわすと主張しアスペクトによって構文の表す意味の違いを説明しようとするものがある²⁾。しかしここでは詳しく検討する余裕はないが、こうした主張に反する例もかなり見られることから考えるとアスペクトによる説明は充分有効なものだとは思われない³⁾。そこで本稿では、従来主張されてきたアスペクトとは違う観点から3つの構文の表す意味の違いを考察することにする。具体的には、1章で知覚の仕方に関する違いを、2章で補文の叙実性⁴⁾の違いを扱う。

また知覚動詞と呼ばれるもののなかでも、*regarder* や *écouter* は(1)c.のような *que* による補文節(以後 *que* 節と呼ぶ)を許さないなど各構文間には分布の違いがある。さらに、各構文の使用は

後で見ると様々な制約を伴う。本稿の第2の目的は、こうした分布や制約の違いをあわせて、なぜ各構文が1, 2章で明らかにされる意味の違いを示すのかを説明することである。ところで現在、言語現象をどのように説明すべきかという点について、大きく分けて2つの立場がある。

1つは、言語構造を自律したものとして捉え、構造内部の原理だけで説明を行なおうという立場、もう一つは、言語構造の成り立ちには、それが表す意味やそれが使われる場面、更には人間の認知能力などが深く関わっていて、そうした言語構造外の要因を考慮することなしに、適切な説明は不可能だとする立場である。前者は非常に精巧な説明原理を備え、これまで幾つもの重要な現象を発掘してきたが、自然言語に特有の、二者択一的でない漸次的な差異を捉えることができない。それに対し後者は、まだ理論としては十分整備されていないが、今まで未解決であったり無視されてきた現象に光を当て、より広い視座から言語現象を眺めることを可能にする。こうした理由により、本稿は後者の言語外の要因を考慮に入れるという立場にたつ。その中でも特に、言語がそれが使われているコミュニケーションの場の中において捉え、言語構造はそのコミュニケーションという機能を効果的・効率的に果すようにつくられているという観点をとる⁵⁾。そしてこうした観点から3章で現象の説明を試みる。

なお、以後便宜上、意味的に主文の主語、動詞、及び補文の主語、動詞をあらわす言語形式をそれぞれ、SN1, SV1, SN2, SV2 と正立字体であらわし、それらの言語形式によって指示される対象や事行を *SN1*, *SN2*, *SV1*, *SV2* とイタリック字体であらわすことにする。

1. 知覚の仕方における違い

1.1 先行研究

知覚の仕方について、SCHWARZE (1974), CADIOT (1976), PREBENSEN (1983), WILLEMS (1983), BENZAKOUR (1984), KLEIBER (1988) は一致して、*que* 節と他の2つの構文 (INF 節と関係節) を対立させ、後者が直接的・物理的知覚を表さなければならないのに対して前者にはそうした制約がないと主張している。特に CADIOT (1976) は、知覚動詞の後の INF 節と関係節がこのように *«une saisie directe de l'objet référé (saisie 'hic et nunc')»* を表すことから、これらを *«relatives et infinitives déictiques»* と呼んでいる。彼らはこうした主張の論拠として、まず例文 (2) に見られるように、INF 節と関係節の表す出来事は主文の出来事 (知覚) と同時でなければならないのに対して、*que* 節にはそうした制約がないことを指摘している。

- (2) * *Je le vois rentrer tard hier soir.* (WILLEMS 1983)

* Je le vois qui est rentré tard hier soir. (ibid.)

Je vois qu'il est rentré tard hier soir. (ibid.)

また知覚が何らかの外的な仲介物を通して行なわれる場合、que節は容認されるのに対して他の2つの構文は容認されないと指摘している⁹⁾。

(3) * D' après ses résultats, je le vois travailler. (BENZAKOUR 1984)

* D' après ses résultats, je le vois qui travaille. (ibid.)

D' après ses résultats, je vois qu'il travaille. (ibid.)

上記の研究により、知覚動詞の補部に生起するINF節と関係節が直接的・物理的知覚を表さなければならないのに対し、que節にはそうした制約がないということが明らかになったが、ではINF節と関係節の表す知覚の仕方には違いがないのだろうか。

RADFORD (1975)とBENZAKOUR (1984)によれば、関係節のSN2が直接知覚できない、あるいは抽象的なものであるとき、その文は容認されない。

(4) * J'ai vu une force invisible qui déracinait les arbres. (RADFORD 1975:56)

(5) * Je regarde ses idées qui se clarifient. (BENZAKOUR 1984:85)

また英語の知覚動詞の後のINF節について、GEE (1977)とKIRSNER & THOMPSON (1976)は、SV2は必ず直接知覚されなければならないが、SN2は必ずしもその必要がないと主張している。例えばGEE (1977)によれば、例文(6)においてMaryは視覚外にいて、知覚主体であるIは彼女をはっきり感じていない状況でもこの文は容認される。

(6) I felt Mary hit me with a stone (Mary could be out of sight, I clearly do not feel her).
(GEE 1977:474)

KIRSNER & THOMPSON (1976)はSN2が直接知覚されない次のような例を挙げている。

(7) We saw the invisible nerve gas kill at the sheep (but of course we didn't actually see the invisible nerve gas itself) (p. 209)

(8) I have seen faith accomplish miracles. (p. 210)

(9) Rover heard it thundering. (does not entail Rover heard 'it'.) (p. 210)

ここで、GEE (1977)と KIRSNER & THOMPSON (1976)の英語についての主張がフランス語の INF 節にも当てはまり、RADFORD (1975)と BENZAKOUR (1984)の関係節の SN2 についての指摘が正しく、かつ本節の最初で検討した何人かの研究者が que 節について行った指摘が正しいとしてみよう。すると問題の3つの補文構造が表す知覚の仕方の違いについて、次のような仮説がたてられる。

(10)◇ INF 節では、SV2 は直接知覚でなければならないが、SN2 は直接知覚されなくてもよい。

◇関係節では、SN2 が直接知覚されなければならない。

◇ que 節では、SV2 も SN2 も直接知覚されなくてもよい。

次節ではこの仮説が妥当かどうか検証するとともに、関係節の SV2 が直接知覚されなければならないかどうかについて検討する。

1. 2 仮説の検証

前節の最後に提案した仮説の妥当性を検証するために、まず GEE(1977)と KIRSNER & THOMPSON (1976)が英語について行なったテストをフランス語にも適用する。これらのテストはまた、関係節において SV2 の直接知覚が義務的かどうかを明らかにする。

通常 SN2 の直接知覚は SV2 の直接知覚も含意するが、GEE (1977)はそうでない場合を想定する。例文(11)、(12)は、彼が提案したテストを多少の変更を加えてフランス語に翻訳したものである。例文(11)では主節動詞は voir で、SV2 は直接知覚されるが SN2 は直接知覚されない。逆に例文(12)では、SN2 は直接知覚されるが SV2 は直接知覚されない。そしてインフォーマント調査によると、例文(11)では INF 節の容認度は関係節よりも高く、例文(12)では逆の結果が得られた。

(11) (状況：ポールは幕の後にいて、姿を観客に見られることなく磁石を使って幕の表面で物体が動くように操作している。話者は今幕の表側にして、物体が動いているのを目にしているがポールの姿は見えない。しかし動かしているのは彼だということは知っている。)

(?) Je vois Paul faire bouger les objets. (*) (O)acg (O)bdef

? Je vois Paul qui fait bouger les objets. (*) (O)cde (O)bf

Je vois que Paul fait bouger les objets. (*) (?) (O)abcdefg

(12) (話者が幕の裏側にいて、ポールは見えているが物体の動きは目にしていないことを除い

ては(11)と同じ状況。)

- | | | | |
|--|------|---------|----------|
| ? Je vois Paul faire bouger les objets. | (*) | (?)acdg | (O)be |
| * Je vois Paul qui fait bouger les objets. | (*) | (?)a | (O)bcdeg |
| ? Je vois que Paul fait bouger les objets. | (*)a | (?)bcg | (O)de |

今度は聴覚に関して、同様のテストを KIRSNER & THOMPSON (1976)から借用する。例文(13)では、SV2 は直接知覚されるが SN2 は直接知覚されない。この場合も我々の調査では、INF 節の方が関係節よりも容認度が高かった。

(13) (状況：話者は鶏の叫び声から農夫がその鶏を殺していると察したが、彼自身はその現場に立ち合わせていない。)

- | | | | |
|---|----------|--------|---------|
| (?) J'ai entendu le paysan tuer un poulet. | (*)f | (?)de | (O)abcg |
| * J'ai entendu le paysan qui tuait un poulet. | (*)adefg | (?)c | (O)b |
| ? J'ai entendu que le paysan tuait un poulet. | (*)c | (?)bde | (O)ag |

以上の結果は、INF 節と関係節については仮説(10)を裏付け、これに関係節の SV2 に関する次の観察を付け加える⁷⁾。

(14) 関係節の SV2 は直接知覚されなくてもよい。

さて、これから仮説(10)および観察(14)を支持するいくつかの論拠を提出していこう。

まず、SN2 が直接知覚されない文を作成しインフォーマント調査を行なったところ、やはり関係節の容認度だけが低かった。

(17) On a vu le bruit (la rumeur) se répandre dans toute la ville.

(*) (?) (O)abcdefg

?? On a vu le bruit (la rumeur) qui se répandait dans toute la ville.

(*)adg (?)ce (O)bf

On a vu que le bruit (la rumeur) se répandait dans toute la ville.

(*) (?) (O)abcdefg

(18) Paul voit avec épouvante les valeurs traditionnelles s'effondrer.

(*) (?) (O)abcdefg

?? Paul voit avec épouvante les valeurs traditionnelles qui s'effondrent.

フランス語知覚動詞の補文として用いられる3つの構文が表す意味の違いについて

(WILLEMS 1983 :151 の例文をいくらか変更したもの)

(*)ae (?)cg (O)bdf

Paul voit avec épouvante que les valeurs traditionnelles s'effondrent.

(*) (?)bf (O)acdeg

また、これまでもいくつか示したが、INF 節と que 節の SN2 が直接知覚されない用例は数多い。

- (19) Il voit le hasard s'étendre, ...grandir par accumulation comme les branches du corail.
(H : 403)
- (20) Il voit l'affaire Haverkamp s'infiltrer et s'étendre. (TII : 90)
- (21) dans le chagrin de voir que ne m'était pas rendu le sentiment que j'avais pour Mme de Guermantes (TII : 142)
- (22) Comment ne pas voir que les années 1675-1677 ont été pour Racine des années cruciales...? (TII : 143)

2つめの論拠は、INF 節の SN2 が再帰代名詞となることは何の問題もないが、関係節ではこれは不可能か少なくとも非常に困難なことである。この現象は、既に ROTHENBERG (1979)が指摘し、我々のインフォーマント調査でも確認されている。

- (23) Cela réveillait quelque chose chez moi [...] je me suis vu éteindre la lumière d'une pièce. (R : 381)
- (24) Marie s'est vue pleurer. (*) (?) (O)abcdefg
? Marie s'est vue qui pleurait. (*)def (?)abcg (O)

こうした振るまいの違いは、普通自分自身は直接知覚できない、という意味的制約から生じたと考えられるから、結局 SN2 の直接知覚性について仮説(10)を支持することになる⁹⁾。

第3の論拠は、非人称表現が INF 節と que 節では可能だが関係節では不可能なことである。

- (25) Nous regardions pleuvoir. (TIII : 91)
* Nous (le) regardions qui pleuvait.
- (26) J'ai vu qu'il y avait encore de la lumière au café de l'Amiral. (Le chien jaune :122)

非人称表現では SN2 は虚辞であるからその指示対象は当然直接知覚できないことを考えると、

この現象も仮説(10)を補強する。

最後に仮説(10)とは直接の関係はないが、間接的にこれを裏付ける論拠を提出する。HATCHER (1944), LE BIDOIS et LE BIDOIS (1935-1938), 朝倉(1955)は、知覚者の注意が INF 節では SV2 に向けられ、一方、関係節では SN2 に向けられると指摘している。この指摘は次の2つの現象から支持される。まず INF 節では SN2 は直接目的補語だけでなく間接目的補語や動作主補語として現われたり、あるいは言及されないこともある。しかし、関係節では SN2 は常に直接目的補語として現われる。

(27) [...] quand j'entends dire à une femme qu'elle aime Paris... (TIII : 91)

(28) [...] il y a des choses qu'on n'aime pas entendre dire par les autres. (TIII : 92)

(29) [...] on entendit tousser dans la chambre (TIII : 93)

ところで、知覚者の注意を引くものは同時に、彼について語る話し手あるいは聞き手の注意を引くものでもあり、情報伝達上 saillant なものだと言える。また文脈、状況、名詞句の指示対象の内在的性質などの要因により談話のなかで saillant な対象は、トピック性が高いと言われる。そして GIVÓN (1984), CROFT (1991)の通言語的な研究によれば、格表示のない直接目的語と、与格、道具格等格表示のある他の斜格との間で選択の可能性のある時、トピック性の高い対象は前者で表現され、より低い対象は後者で表現される。故に与格や道具格で表示される INF 節の SN2 は、ゼロ表示である関係節の SN2 よりもトピック性が低く、SN2 が言及されない時にはなおさらそうである。言い換えれば、INF 節では関係節に比べて、SN2 が知覚者の注意を受ける度合いはより低い方に偏っている。

また *surprendre*, *croiser*, *rencontrer* 等の、通常出来事ではなくモノや人を目的語にとる動詞は、関係節を補部とすることはできるが INF 節を補部とすることはできない。

(30) Je l'ai surpris qui en sortait. (TII : 147)

(31) [...] il rencontra l'inspecteur Leroy qui le cherchait. (Le chien jaune : 99)

この現象は我々の考えでは、一般に関係節の SN2 は INF 節のそれに比べて目的語性が高い方に偏っていることを示している。以上の観察結果が知覚動詞の補部にあてはまるとすれば、関係節の SN2 は INF 節のそれに比べて目的語性が高い、つまり出来事の中でそれだけが特に知覚の焦点に成りやすいと言える。

そして、直接知覚されるものは、間接的にしか知覚されないものに比べて注意を引きやすいという相関関係が想定されるから、知覚者の注意が INF 節では SV2 に向けられ、一方、関係節で

は SN2 に向けられるという先の観察は、仮説(10)と同じ方向を示唆することになる。

以上の論拠から、我々は仮説(10)は確認されたと考える⁹⁾。最後にこの仮説と先に得た観察(14)を、観察(32)としてまとめておく。

(32)◇ INF 節では、SV2 は直接知覚でなければならないが、SN2 は直接知覚されなくてもよい。

◇関係節では、SN2 は直接知覚されなければならないが、SV2 は直接知覚でなくてもよい。

◇ que 節では、SV2 も SN2 も直接知覚されなくてもよい。

2. 補文の叙実性

補文をとる述語のなかで、主文の内容が真であるかどうか¹⁰⁾に関わらず補文の内容が真実であることを前提とする¹¹⁾ものを叙実述語といい、その補文を叙実補文と呼ぶ。例えば、例文(36)a,b はともに「彼は来ない。」ことを前提とし、(37)a,b も同様に「彼には敵がいた。」ことを前提としている。

(36) a. Je regrette qu'il ne vienne pas.

b. Je ne regrette pas qu'il ne vienne pas.

(37) a. Je savais qu'il avait des ennemis.

b. Je ne savais pas qu'il avait des ennemis.

従って que 節をとまう regretter と savoir は叙実述語であると言える。しかし、一括りに叙実述語といってもそのなかには叙実性の程度に違いがある。例えば savoir など認識を表す叙実動詞は、条件節のなかに置かれると必ずしもその補文の真実性を前提としないなど叙実性がそれ程強くないところから、半叙実動詞と呼ばれることもある。英語の知覚動詞 see は半叙実動詞に属するとされている。また regretter などの強い叙実動詞でも、例えば rêver de の後におかれた場合には、補文の真実性を前提しないこともある。このように叙実性は相対的なものに過ぎない。また叙実性はもともと述語の語彙に固有の前提であるが、動詞によっては何種類かの補文をとり、しかも補文の種類によって叙実的であったり非叙実的であったりするものもある。例えば上で見たように、que 節をとまう savoir は補文の真実性を前提するが、次のように si によって導入される補文をとまう savoir は補文の真実性を前提しない。このような場合には叙実性の出所は動詞

だけでなく補文にも帰されるべきである。

(38) Je (ne) savais (pas) s'il avait des ennemis.

以下本章では、1章で問題にした3つの構文が同じ知覚動詞の補文として現われる時、主文動詞の語彙的前提とあいまって構文としての叙実性が前提されるかどうかについて、各補文間の違いを検討する。

2. 1 先行研究

述部または補文の叙実性のテストとして、先に主文の否定が補文の内容の真実性に影響を与えるかどうかということを提出したが、この他にもさまざまなテストが提案されている。本節では、これまで知覚動詞の補文の叙実性についてなされてきた幾つかの研究を、どういうテストを判定基準としているかに注目しながら振り返る。

SCHWARTZE (1974)は主文動詞の疑問を判断基準として、voirの補文のINF節は非叙実的だが関係節は叙実的だとしている。例えば彼によれば、*Tu le vois qui arrive?*は問題の人が実際に到着することを前提するが、*Tu le vois arriver?*はこれを前提しない。

WILLEMS (1983)は主節動詞の否定をテストとして、voirの補文のINF節は非叙実的だがque節は叙実的だとしている。例えば、彼は、例文(39)a.では *Paul mange ce plat.*という内容は前提されるが、例文(39)b.では前提されないと主張している。

(39) a. Jean ne voit pas que Paul mange ce plat. (p. 154)

b. Jean ne voit pas Paul manger ce plat. (p. 154)

KLEIBER (1988)は特別な根拠はあげていないが、関係節が表す出来事は現実的、事実的、偶有的世界で起こるだけで可能的、潜在的、反事実的世界では生じえないと指摘している。つまり、彼によれば知覚動詞の関係節補文は叙実的である。

CADIOT (1976)はSCHWARTZE (1974)と同様、主節動詞の疑問をテストとして、voirの補文のINF節は非叙実的だとする。ただし、SCHWARTZE (1974)、KLEIBER (1988)とは違って関係節も非叙実的だとしている。彼によれば(40)a, bとも *Jean arrive* ということを前提とせず、この2つの文は *Jean arrive-t-il?* とほぼ同義である。

(40) a. Le [Jean] vois-tu qui arrive? (p. 14)

b. Le [Jean] vois-tu arriver? (p. 14)

また彼は主文動詞の否定をテストとして、que 節は叙実的だと主張している。彼によれば、*Jean ne voit pas que Paul mange.* という文において、否定は *Paul mange* という補文内容の前提にたいして何らの変化ももたらさない。

BENZAKOUR (1984)は主文動詞の疑問と否定を判断基準としているが、その主張は SCHWARTZE (1974)の正反対である。つまり、彼は voir の補文の INF 節は叙実的だが関係節は非叙実的だと主張している。

- (41) a. Est-ce que tu vois l'avion qui atterrit? (p. 82)
b. * Je ne {vois pas l'avion/ le vois pas} qui atterrit. (p. 82)
- (42) a. Je ne {vois pas l'avion/ le vois pas} atterrir. (p.82)
b. Je ne l'ai pas vu atterrir. (p.82)

彼によれば、(41)a.の関係節の内容は主文の疑問に影響を受けて、事実として前提されない。また(41)b.でわかる通り主節の否定は関係節補文と共起しない。しかし、INF 節とは共起して、(42)a, b はそれぞれ *L'avion atterrit*, *L'avion a atterri* という内容を前提する。

次に参考として、英語の知覚動詞の INF 節補文の叙実性について扱っている2つの研究を検討してみよう。この2つとも、判定テストとして知覚内容の真実性を否定するような文脈をつくり、その中でも INF 節補文を使えることを確認している。つまり、明言はしていないが両者の研究によれば英語の INF 節補文は非叙実的だということになる。例えば KIRSNER & THOMPSON (1976)は、次の文には何の矛盾もないとしている。

- (43) When the neurologist stimulated that particular area of her brain, Susan saw the light turn red even though it really did not. (p. 212)

また、LAKOFF (1987)は次のような興味深い指摘をしている。心理学の有名な実験によれば、2つの点 A, B にごく短い間隔で光を点滅させた場合、被験者は2つの光が点滅したというよりは点 A から点 B へ一つの光の筋が通過したと知覚する。こうした事態を INF 補文を使って表現する時、彼によれば(44)b.より(44)a.が適切である。

- (44)a. Harry saw a single light move across the screen. (p. 127)
b. Harry saw two lights flash on the screen. (p. 127)

以上本節で検討してきた先行研究をまとめると、次の表が得られる。

	叙実的	非叙実的
INF 節	BENZAKOUR (1984)	KIRSNER & THOMPSON(1976) LAKOFF(1988),WILLEMS(1983) SCHWARTZE(1974),CADIOT(1976)
関係節	SCHWARTZE(1974),KLEIBER(1988)	BENZAKOUR(1984),CADIOT(1976)
que 節	WILLEMS(1983),CADIOT(1976)	∅

この表に表れているように、que 節を除いて各補文の叙実性について、特に関係節補文の叙実性について意見は分かれている。この意見の不一致は本章の冒頭で指摘したように、各補文の叙実性が相対的なものにすぎないためであるが、また従来テストを振り返ってわかるように、叙実性の判断が各研究者の主観に委ねられていたからでもある。次節では、叙実性は相対であることを考慮しながら、より客観的で明示的なテストを提案し、そこから引き出された結果を提示する。

2. 2 調査結果と結論

まず、これまで補文の叙実性を抽出するために提示された形式的基準を検討する。

KIPARSKY&KIPARSKY(1970)は英語の述語の叙実性を判定するテストとして、(I)the fact that または the fact of を補文にとる、(II) (属格つきの)動名詞を補文にとる、(III)対格+(to)不定詞の補文はとらない、(IV)補文の構成素の wh 移動を許さない、(V)補文全体を代名詞で受ける時 so ではなく it を使う、(VI)補文から主文への否定の繰り上げを許さない、などの基準を提案した。また、彼らは、なぜ上のテスト(I)~(VI)が一致した振るまいを示すのかについて、テスト(I)を基本にし、当時の生成文法の枠組に従って次のように説明した。彼らによれば、叙実述語の補文は主節動詞に支配されているのではなく、表層では削除されているが、基底では名詞句 the fact に支配される複合名詞句である。故に名詞句補文であるから、so で受けられる動詞句補文と違って、それを受ける代名詞はテスト(V)が示すように it である¹²⁾。また複合名詞句制約¹³⁾により、(III)のような補文の主語の主文への繰り上げや¹⁴⁾、(IV)、(VI)にみられる複合名詞句内の要素の外部への移動は禁止される。ところがテスト(I)をフランス語の強い叙実述語である constater と幾つかの知覚動詞に適用してみると、CADIOT (1976)が指摘するように、前者と違って後者はこのテストを満たさないという結果が得られる。

(45) Jean constate le fait que Paul mange. (CADIOT 1976: 5)

* Jean		voit		le fait que Paul mange. (ibid. p. 5)
		entend		
		sent		
		aperçoit		

従って、もし KIPARSKY&KIPARSKY (1970)の説明が正しいなら、フランス語の知覚動詞の補文は複合名詞句をなしていないのだからテスト(III)~(VI)は適用できないということになる。

しかし、テスト(IV)~(VI)については、複合名詞句制約などの統語的なものとは別の機能的な説明も可能である。ERTESCHIK-SHIR & LAPPIN (1979)はテスト(IV)~(VI)に関して、補文内の要素の抜き出しが不可能なのは伝達の重点が補文よりも主文に置かれる時であると主張している。またテスト(V)に関して中右 (1983)によれば、補文内容が「既定」のときそれを受ける代名詞は *it* であり、「非既定」のときそれは *so* で受けられる。そして、文の内容は話者の主張を表す断定と前提からなり、伝達の中心や「非既定」の内容は断定にほぼ相当することを考えると、彼らの主張に従えば、(IV)~(VI)は補文の叙実性の前提を調べるテストというよりは、単に補文が断定されていないことを明らかにするものでしかない。ところで、英語の *deny* のように、補文は非断定的だが非叙実的という動詞も存在する。故に、補文が断定されていないからといって必ずしもその叙実性が合意されるわけではない。結局、彼らの機能的な説明が正しいとしても、先の統語的な説明によるのと同様、テスト(IV)~(VI)は補文の叙実性を調べるためには有効ではないことになる¹⁵⁾。

また、我々は、同一述語がとる様々な補文の相対的な叙実性を調べているのであるから、補文の書き替え操作を含むテスト(I)~(III)はいずれにしても使えない。

以上のことから、どのように考えるにしても KIPARSKY&KIPARSKY (1970)が提案した6つのテストは、本節での我々の目的にとっては有効ではない。

そこで、我々は、補文の叙実性を定義する基準であり、前節で検討した先行研究でも用いられていた主文の否定が補文の真実性に影響を及ぼすか否かというテストを再びとり上げ、明示的な結果がでるように工夫した。次の例文(46)では主文動詞が否定されていて、しかも文脈から補文の内容も否定されるという解釈が優勢である。この時、INF節は全てのインフォーマントに容認されたが、*que*節については意見が割れ、関係節を容認する人は一人もいなかった。

(46) A: Selon Paul, Marie pleurait à ce moment-là.

B: Ce n'est pas vrai. Moi, je ne l'ai pas vue pleurer.

(*) (?) (O)abcdefg

* *Moi, je ne l'ai pas vue qui pleurait.*

(*)abdef (?)cg (O)

? *Moi, je ne l'ai pas vu qu'elle pleurait.*

(*)adf (?)b (O)ceg

更に、*que* 節を容認した人達に質問すると、彼らは主文の否定が補文の内容に及ばない解釈を行なったのであった。従って、このテストだけからすると、INF 節は非叙実的だが関係節と *que* 節は叙実的だという結論が得られる。

実際、INF 節の内容が主文の否定に影響を受けるということは、次の用例からも確認される。主文の否定が、例文(47)では補文全体に、(48)では補文内の限量詞 *tant* に、(49)では SV2 の目的語である *ces paroles* にかかっている。

(47) [...] *je ne me vois pas courir les agences pour l'emploi ; je ne me vois pas [...] faire la navette tous les jours entre mon lieu de travail et la maison.* (linguaphon : 60)

(48) *Je n'ai jamais vu faire tant de bruit dans une chambre de malade que cette Alphonsine.* (T III : 90)

(49) *ces paroles comme il n'en entendait jamais prononcer aux demoiselles de Saint-Marc* (T III : 92)

しかし、このテストは関係節に対しては有効ではない。何故なら、CADIOT (1976), ROTHENBERG (1979), PREBENSEN (1982), WILLEMS (1983), BENZAKOUR (1984), KLEIBER (1988) が一致して指摘するとおり、補文の真実性が保たれる場合でも関係節は主節の否定とは共起しないからである¹⁶⁾。実際、我々の調査によっても同様の結果が得られた。例文(50)では文脈によって補文の内容が真実であることがはっきり前提されているにもかかわらず、容認度はかなり低かった。

(50) A : *Hier, Kazu a marqué deux buts, tu sais?*

B : *Oui, bien sûr. J'ai regardé le match à la télé. Mais malheureusement,*

?je ne l'ai pas vu qui marquait le 2e but. A ce moment-là, j'étais en train de téléphoner.

(--)d (-)ae (O)bc (+)fg (++)

さらに、これは幾らか議論の余地があるが、先に挙げた研究のいくつかによると、否定だけでなく SV1 が疑問などの何らかのモダリティー表現を伴う場合にも、関係節はかなり容認度が下がる¹⁷⁾。従って、主文の否定、疑問などとは別のテストも必要になってくる。

そこで、次に KIRSNER & THOMPSON (1976), LAKOFF (1987)などが用いていたテストを利用する。彼らは、補文内容の真実性を否定する「while on the drug», «when the neurologist stimulated that particular area of her brain»などの語句を導入し、そうした環境での補文の生起可能性を調査していた。それと同様、次の例文⑤1), ⑤2)ではそれぞれ「prétend», «aurait (contre-factuel)»が補文の真実性を低下させ、更に文脈によりこれは完全に否定される。この時、容認度が低いほど、その補文の叙実性は高いことになる。

- ⑤1) Paul prétend avoir vu, hier soir, Marie marcher dans le quartier. Mais hier soir, elle a, en fait, bavardé avec ma famille jusqu'à minuit. Donc il a dû se tromper.

(--)(-) (O) (+) (+)b (++)aef

- (?) Paul prétend avoir vu, hier soir, Marie qui marchait dans le quartier.

Mais hier soir, elle a, en fait, bavardé avec ma famille jusqu'à minuit.

Donc il a dû se tromper.

(--)(-) (O)b (+)aef (++)

- * Paul prétend avoir vu, hier soir, que Marie marchait dans le quartier.

Mais hier soir, elle a, en fait, bavardé avec ma famille jusqu'à minuit.

Donc il a dû se tromper.

(--)(-)abf (O)e (+) (+) (++)

- ⑤2) Elle aurait sans doute deux enfants, un fils pour lui, une fille pour elle.

Et elle les voyait courir sur l'herbe, tandis que le père et la mère les suivraient d'un œil ravi. Mais le fait est qu'elle n'avait aucun enfant.

(--)(-) (O) (+)bf (++)acdeg

- (?) Elle aurait sans doute deux enfants, un fils pour lui, une fille pour elle.

Et elle les voyait qui couraient sur l'herbe, tandis que le père et la mère les suivraient d'un œil ravi. Mais le fait est qu'elle n'avait aucun enfant.

(--)(-) (O)ae (+)bd (++)cfg

- * Elle aurait sans doute deux enfants, un fils pour lui, une fille pour elle.

Et elle voyait qu'ils couraient sur l'herbe, tandis que le père et la mère les suivraient d'un œil ravi. Mais le fait est qu'elle n'avait aucun enfant.

(--)adf (-)bce (O)g (+) (++)

両方の文で INF 節はかなり自然だと判断された一方、que 節を自然だと判断した人は一人もいなかった。従って、相対的に言って前者は非叙実的であり後者は叙実的である、というこれまで

の観察がここでも確認されたことになる。関係節については、確かに不自然だと判断した人はいなかったが、例(50)のインフォーマント b.を除いて INF 節よりも容認度が上と判断した人もいなかった。従って、このテストからは、関係節の叙実性はかなり低い、INF 節ほど非叙実的ではないという結果が得られることになる。

以上のデータから、3つの補文の叙実性の相対的な強さについて次のようにまとめられる。

- (53) INF 節は非叙実的。que 節は叙実的。関係節の叙実性は疑わしいが完全には否定できない。

3. iconicity の仮説による現象の説明

序章で示したように本稿は、言語の最も中心的な機能は情報の伝達であり、言語構造はこの情報伝達という機能を効果的・効率的に果たすようにつくられているという立場に立つ。ところで、近年こうした立場をとる研究者達によって、言語構造の成り立ちを説明するためにいくつかの仮説が提案されている。その一つに、いわゆる iconicity の仮説がある。これは、「他の条件が同じなら、言語によって表現される経験は、言語の構造と経験の構造が最大限平行的であるほうが、限られたコミュニケーションの時間の中でより容易にコード化し、コードから解読し、また情報として貯蔵することができる。」という前提から、「言語の構造は、それが表現する経験内容の構造を反映する。より正確に言えば、言語構造の各部分間の関係はそれによって表現される経験の各部分間の関係を反映する。それ故両者が一致する限りにおいて、前者は後者によって動機づけられ、あるいは説明される。」と主張するものである。この仮説は、言語の恣意性を標榜するソシュール以来の言語観と一見対立するように見えるが、言語構造(形式)の各要素とそれが表す意味との関係が恣意的であることは認めており必ずしも矛盾するものではない。

そして、この iconicity の仮説の一つの系として、「構成素間の言語上の距離は、その構成素が表す経験の間の概念上の距離を反映する。」とする距離の iconicity 仮説が提案されている。現在この仮説は、可分離所有や不可分離所有などの所有表現、直接使役と間接使役などの使役表現、時制・相・法などを表す形式が動詞句内で占める相対的位置、など様々な領域で言語構造の成り立ちを説明しえるものとして注目を集めている。そうした中で GIVÓN (1990)は通言語的な観点から、主文と動詞補文の間の形態・統語的な距離と、それらが表す経験の概念的な距離をはかる指標を提出したものとして注目される。本章ではこの GIVÓN (1990)の枠組みに従いながら、1章と2章で明らかにした3つの補文構文が示す意味の違いがなぜそのようなになっているのか、距離の iconicity 仮説によってかなりの程度納得できる説明が可能であることを示す。ただし、言語構造

に働いている動機づけは iconicity の原理だけではなく、経済性などの他の動機づけが介在することもあり、そのように幾つかの原理が競合するときには iconicity の原理が実現しないこともありうる。こうした留保も念頭におきつつ、以下考察を進める。

3. 1 GIVÓN (1990)の主張

彼は、補文構造の意味的な面と形態・統語的な面とのあいだに、「主文と補文が表す出来事・経験の間の意味的な結びつきが強ければ強いほど、2つの節の間の形態・統語的な結びつきも密接になる。」といった相同性 (isomorphism) が存在すると主張する。本節ではこの相同性の主張を詳しく考察する。

意味的な面について、彼はまず目的語として補文をとる動詞を次の3種類に分類する。(1) modality verbs: 補文の出来事の起動, 完了, 持続, 成功, 失敗, 試み, 意図, 義務, 能力などを表すものでフランス語では vouloir, commencer, finir, essayer 等がこれに当たる。(2) manipulative verbs: 補文の出来事に対する SNI の働きかけを表す faire, laisser, ordonner, demander 等。(3) cognition-utterance verbs: 知覚, 認識, 心的態度, 発言などを表す動詞で, savoir, penser, dire 等。そして彼は、クラス(3)の動詞が使われる時は、他の2つのクラスの動詞に比べて、主文と補文が表す出来事間の結びつきはもともと幾らか弱いと指摘している¹⁸⁾。

更に彼は、主文動詞が同じでも、主文と補文が表す出来事間の意味的な結びつきの強さは変化すると考え、この結びつきを強める方向に働く次の5つの要因を指摘している。(a)主文と補文の出来事の同時性, (b) (特にクラス(2)の動詞について) SNI と SN2 の直接的接触, (c) SNI の強い意図性, (d)補文節の真実性が主文の真実性によって含意されるという“含意性”, (e)主文と補文の中の同一指示的な名詞句の存在。

次に形態・統語的な面について、彼は次の4つの要因を関与的なものとして挙げている。

(I) SV1 と SV2 の同一語彙化: 例えば彼は、次の英語の例文中の *let* と *go* や、スペイン語の例文中の *vió-caer* は同一語彙化しているとする。

(51) She *let go* of him.(GIVÓN 1990: 522)

(52) Maria le *vió-caer* a Juan.(GIVÓN 1990: 539)

Maria le *vió-tomber* à Juan.

(II) 2つの節を明示的に隔てる形態素の存在, (III) SV2 の格標示, (IV) SV2 の形態的扱い。

最後に彼は、意味的な面と形態・統語面に次のような相同性が見られると主張する。

(53) 「主節と補文節が表現する事行が意味的に密接に結びついていなければならないほど、

- (A) SV1 と SV2 の動詞語幹がより統合され、
- (B) 2つの節が従属節導入語（補文標識など）で隔てられる可能性は低くなり、
- (C) SV2 が主節の典型的な主語・動作主としての格標示を受ける可能性は低くなり：典型的な主語・動作主を表す格標示の階層（主語＞直接目的語＞間接目的語＞斜格）、
- (D) SV2 はより名詞的になり、時制・相・法・性数の一致のような典型的な定動詞が持つ形態的特徴を示さなくなる¹⁹⁾。」

3. 2 現象の説明

我々が研究対象としている知覚動詞は、GIVÓN (1990)の分類によれば、主文と補文の表す出来事間の関係がもともとそれ程密接でない cognition-utterance verbs に属する。このことは、知覚動詞が補文をとる場合、SN1 と SN2 が同一指示で INF 節をとる時でも再帰代名詞が残り、modality verbs に属する vouloir のように SN2 がゼロ標示ではないことから伺える。本節では 1, 2 章で明らかにした 3 つの補文の表す意味の違いが生じる理由を、意味と形式の相同性により説明するが、その前に我々の分析に関与的な形式的、意味的要因を、GIVÓN (1990)を幾らか修正しながら明確化しておく。

3. 2. 1 関与的な意味的、形態・統語的要因

先ず、形態、統語面について検討する。GIVÓN (1990)の要因(II)に関して、フランス語の知覚動詞は、GIVÓN (1990)では言及されていない関係節補文を許し、この時、従属節導入語でもある関係代名詞 qui は、que 節の補文標識 que が節の先頭に位置するのとは違って SN2 と SV2 の間に位置する。従って、フランス語の関係節補文を INF 節補文や que 節補文と比較するためには、従属節導入語の存在の有無だけでなくその位置も考慮する必要がある。要因(I)については、GIVÓN (1990)の先の例からするとフランス語の faire + INF a/ par qn.等の使役動詞構文や voir + INF à/ par qn.等の一部の知覚動詞の構文では SV1 と SV2 の統合度が高いと言えるかもしれない。しかしこの点については、まだ統語論の分野でも意見の一致が見られていないようであり、以下の我々の議論では触れないことにする。以上 2 つの修正を加え、GIVÓN (1990)が提案した形態・統語的な要因を我々の考察に直接関与的な形でまとめると次のようになる。

- (II'') 主節と従属節の境界を明示的に表す、従属節導入語（補文標識）que または qui の存在の有無とその位置。
- (III'') SN2 が主語、直接目的補語、間接目的補語、動作主補語のうちどの形の格標示を受けらるか。
- (IV'') SV2 が不定法として表示されるか、活用語尾を伴った定動詞として表示されるか。

フランス語知覚動詞の補文として用いられる3つの構文が表す意味の違いについて

そして、こうした要因を基準として問題の3つの補文構造の間の形態・統語上の違いをまとめると次のようになる。

(54) INF 節 : (II'')補文標識はなし。

(III'')通常 SV1 の直接目的補語だが、SV1 の間接目的補語、動作主補語として表示されることもある。

(IV'')不定法。

関係節 : (II'')qui が SN2 と SV2 の間に位置し、SN1, SV1, SN2, || SV2 という配置。

(III'')SV1 の直接目的補語として。

(IV'')活用語尾を伴った定動詞として。

que 節 : (II'')que が SV1 と SN2 の間に位置し、SN1, SV1, || SN2, SV2 という配置。

(III'')SV2 の主語として。

(IV'')活用語尾を伴った定動詞として。

補文の意味的な側面に関与する要因については、GIVÓN (1990)を踏襲する。ただし、彼は補文の形式面と相関するのは主文と補文が表す2つの出来事の結びつきの強さだとしているが、我々の分析ではそれだけではなく、主文が表す知覚と SN2 の間、あるいは主文が表す知覚と SV2 の間、更には SN1 と SN2 の間の結びつきの強さなど、場合によって様々な関係を考慮する必要がある。

3. 2. 2 1章で扱った現象の説明

1章で扱った現象の意味的な側面には、GIVÓN (1990)が指摘した5つの要因のうち3つが関与している。すなわち、(a)主文と補文が表す2つの出来事の同時性、(b)SN1 と SN2 の直接的接触、(c)主文と補文が表す2つの出来事内での同一指示物の存在、である。この内(a)、(b)は本来独立の要因であるが、この場合、後で述べるように、関係節が表す出来事について(a)は(b)に密接に関連している。そこで先ず(b)についての検討から始めて3つの補文が表す意味の違いが、iconicity 仮説で説明されることを示す。

まず、距離の iconicity 仮説の意味的な面に、要因(b)で問題になっている空間性を当てはめると、「言語形式面での直接的関係は、意味的な面での空間上の直接的関係と“相同的に”相関する。」という下位仮説が得られる。

次にこの場合、意味的には2つの出来事間の関係ではなく、主文が表す知覚と SN2、あるいは主文が表す知覚と SV2 の間の関係が問題になっていることを考え、各々の構文の形式的特徴(54)

のなかから(II'')だけを取り出してみる。

INF 節：(II'')補文標識はなし。

関係節：(II'') qui が SN2 と SV2 の間に位置し、SN1, SV1, SN2 || SV2 という配置。

que 節：(II'') que が SV1 と SN2 の間に位置し、SN1, SV1 || SN2, SV2 という配置。

形式的観点からすると、que 節では SN2, SV2 がともに主文の構成要素である SN1, SV1 から補文標識によって隔てられている。一方、関係節では SN2 が、INF 節では SN2, SV2 がともに、SN1, SV1 と補文標識によって隔てられない直接的関係にある。すると先の下位仮説は、3つの補文構造とその表す意味に次の対応があることを予測する。

⑤◇ INF 節では、SV2 も SN2 も直接知覚されなければならない。

◇ 関係節では、SN2 は直接知覚されなければならないが、SV2 はその必要はない。

◇ que 節では、SV2 も SN2 も直接知覚されなくてもよい。

ところで、我々は、1章で次の観察結果を得た。

③◇ INF 節では、SV2 は直接知覚されなければならないが、SN2 はその必要はない。

◇ 関係節では、SN2 の指示対象は直接知覚されなければならないが、SV2 はその必要はない。

◇ que 節では、SV2 も SN2 も直接知覚されなくてもよい。

⑤と③を比べてみると、距離の iconicity 仮説による予測⑤は実際の観察結果③とほとんど一致する。ただし、唯一 INF 節の SN2 については予測が外れている。この不一致は、INF 節の SN2 においては距離の iconicity の原理とそれ以外の動機づけが競合していて、後者が前者を強さにおいて上回ったために生じたと考えられるが、今は“それ以外の動機づけ”が何であるか決定できていない。しかしおそらく INF 節の SN2 の統語上の規定の問題が関わっていると思われる。

次に要因(a)「2つの出来事の同時性」について考察する。一見すると時間的なものを表すのは動詞だから、ここで問題になっている意味的關係は、SV1 と SV2 の間の関係であるように思われる。そこで形態・統語的な面からすると、先に見たように SV1 と SV2 の間に INF 節では補文標識は介在していない。一方、関係節では qui が、que 節では que が2つの動詞を隔てている。時間的な面に適用された距離の iconicity は、「言語形式面の直接的関係は、意味的な面での時間上の直接的関係と“相同的に”相関する。」と主張するから、「INF 節の表す出来事は主文の表す知覚と

同時に起こらなければならないが、関係節と que 節の表す出来事にはこうした制約がかからない。」という予測が得られることになる。ところで、我々は1章で、「INF 節と関係節の表す出来事は主文の表す知覚と同時に起こらなければならないが、que 節はこの制約から免れている。」という観察を得ている。従って、仮説は INF 節と que 節には正確な予測をするが、関係節についてはあてはまらないかのように思われる。

しかし、先に見たように関係節が使われる時には、SV2 を行なっている SN2 を、SN1 は直接知覚しなければならない。すると、当然 SV1 は、SV2 と同時に起こることになる。そのように考えると、関係節補文の表す出来事と主文の表すそれとの同時性について考えるためには、意味的には2つの動詞が表す事行間の関係だけではなく SV1 と SN2 の関係について、形式面では2つの動詞の距離だけでなく SV1 と SN2 の距離について考慮に入れる必要があったことになる。従って、意味的要因(a)について距離の iconicity の仮説は、必ずしも不完全な予測をするわけではない。

最後に(e)について1章で、「関係節では SN2 が SN1 と同一指示を行うのは不可能か少なくとも非常に困難であるが、INF 節ではこれは何の問題もない」ことを見た。そして1章ではこの違いを、各構文において SN2 の間接的知覚が可能かどうかという観点から説明した。しかしここでは別の見方も可能であることを示す。

この場合、意味的には2つの出来事間の関係が問題になるのだから、形式的にも2つの節全体としての結びつきを問題にしなければならない。まず補文の形態・統語面について、GIVÓN (1990)の定式(53)を参照しながら、次の相関を立てることができる。(現在は、INF 節と関係節が問題になっているだけだが、後の議論の便宜を考えて、que 節も含めて考察することにする。)

- ◇ 2つの節が補文標識で隔てられていれば、
- ◇ SN2 が間接目的補語や動作主補語ではなく、直接目的補語として格表示されていれば、
そして、それよりも主語として格表示されていれば、
- ◇ SV2 が不定形ではなく、活用語尾を伴った定動詞として表示されていれば、
主節と補文節が形式的により隔てられていると言える。

ここで3つの補文の形態・統語的な特徴をまとめた(54)を思い起こし、この形式的相関と照合して見よう。すると、主節と補文節全体の間での形態・統語的な結びつきの相対的な強さを示す、次のスケールを得る。

(56) 「que 節 < 関係節 < INF 節」

故に、形態・統語的な観点からすると、INF節補文のほうが関係節補文よりも主節と密接な関係にあることになる。一方、GIVÓN (1990)の意味的要因(e)により、主文と補文が表す出来事内に同一指示物が存在していれば、2つの出来事間の意味的な距離は狭まる。従って、距離の iconicity 仮説によれば、同一指示物が存在する場合の表現としてはINF節補文のほうが関係節補文よりも適していることになる。そしてこの予測は1章で観察した現象に合致している²⁰⁾。

以上1つの例外を除いて、距離の iconicity 仮説は1章で観察された現象を自然に説明することを見た。

3. 2. 3 2章で扱った現象の説明

前節で我々は、GIVÓN (1990)が主文と補文が表す出来事間の意味的な結びつきを強める要因(d)として、主文の真偽が補文の真偽を含意するという“含意性”を挙げていることを見た。彼はこの概念を KARTTUNEN (1971)から借りているが、KARTTUNEN (1971)自身は、SN1とSN2が同一指示でSN2がゼロ表示のto-不定詞補文節をとる動詞のうち、補文の真実性のための必要十分条件の前提を含むものを“含意動詞”と呼び、このタイプの動詞を抽出するために次のテストを提案している。1) 主文中の肯定・否定・疑問・命令などのモダリティは補文にもかかる。例えば、Sを補文とする文をv(S)で表し、S, v(S)の否定形をそれぞれnot S, not v(S)で表すと、manageなどの“含意動詞”においては、 $v(S) \rightarrow S, \text{not } v(S) \rightarrow \text{not } S$ という2つの関係が同時に成立する。2) V1とV2の時制が一致する。3) 主文にかかる、時間、場所を表す副詞句・従属節は同時に補文にもかからなければならない。この内、本節では、時間上・空間上の同一性と“含意性”を分けて考えているから、循環論的な定義に陥らないためにテスト2), 3)は考慮に入れないことにする。

また、我々が2章で扱った“叙実性”とは要するに、主文中の肯定・否定・疑問・命令などのモダリティが補文にかからず、補文の真実性が主文の真実性から独立しているという現象であった。すると、もともと“含意性”はto-不定詞補文節をとる動詞を、“叙実性”は主に補文標識thatによって導入される補文節をとる動詞を分類するための指標であったという違いはあるが、補文の主文からの意味的な独立性についてこの2つの現象はまったく対照的な性質を示すと言うことができる。従って、“含意性”の強さが主文と補文が表す出来事間の意味的な結びつきの強さを示すのと逆に、“叙実性”の強さはこの結びつきの弱さを示すといえる。

ところで、我々は、2章で次の結論を得た。

- (50) INF節は非叙実的。que節は叙実的。関係節の叙実性は疑わしいが完全には否定できない。

フランス語知覚動詞の補文として用いられる3つの構文が表す意味の違いについて

従って3つの補文構造について、意味的要因(d)に関して主文と補文が表す出来事間の意味的な結びつきの相対的な強さを示す、次のスケールを立てることができる。

(57) 「que 節<関係節<INF 節」

また我々は先に、主節と補文節の間の、形態・統語的な結びつきの相対的な強さを表すスケール(56)を得ていた。

(56) 「que 節<関係節<INF 節」

そして、距離の iconicity 仮説は、形態・統語的なスケール(56)の順に、3つの補文が表す内容と主文の内容との結びつきが強いことを予測するが、この予測は意味的スケール(57)によって確認される。

3. 2. 4 SV1 が regarder, écouter の場合

最後に、regarder と écouter の補文構造の問題について検討する。この2つの動詞は典型的な知覚動詞だが、両方とも que 節を許さない。この現象はすでに SCHWARTZE (1974), WILLEMS (1983), BENZAKOUR (1984)によって指摘され、彼らはそこから、GROSS (1968), (1975), KAYNE (1975)らが唱えていた que 節からの INF 節や関係節の派生を否定する論拠を引き出している。しかし、彼らは、なぜこの2つの動詞が voir, entendre, sentir などと異なる振るまいをするのか十分説明していない。

ところで、voir, entendre, sentir になくて regarder と écouter が持っている意味的な特性は、知覚主体 *SNI* の強い意図性である。これは GIVÓN (1990)が、主文と補文が表す出来事間の意味的な結びつきを強めるものとして提示した5つの要因の(c)にあたる。故に regarder や écouter が使われる場合には、entendre, voir, sentir が使われる場合に比べて、2つの出来事間の意味的な結びつきがもともと強い。

形態・統語的な面では、スケール(56)より、que 節は3つの補文節のなかで主節から最も独立した補文節である。

また、形式的な距離と意味的な距離は相同的に相関するという iconicity 仮説は、形態・統語的に主文と独立している補文は、補文の内容が意味的に主文の内容に従属している場合の表現としては適さないと予測する。そして、この予測は現象に合致している。

従って今まで十分な説明が与えられずにいた、regarder や écouter が que 節を許さないという一見特異な振るまいも、距離の iconicity 仮説によって自然に説明できた。

4. 結論

我々は、1, 2章で、いくつかの知覚動詞の3つの補文構造が表す意味の違いのうち、2つの面について明らかにした。それらの違いは、次の表のようにまとめられる。

	INF 節	関係節	que 節
知覚の仕方	SN2: ±直接知覚 SV2: +直接知覚	SN2: +直接知覚 SV2: ±直接知覚	SN2: ±直接知覚 SV2: ±直接知覚
叙実性	弱	中間的	強

そして、3章で、なぜこのような違いが生じるのかということ、regarderやécouterがque節を許さない理由とあわせて、距離の iconicity の仮説によってかなりの部分自然に説明できることを示した。知覚の仕方と叙実性以外の面でも、形式と意味の iconicity が認められるかどうか調べることは、今後の課題である²¹⁾。

註

*) 本研究においては、京都大学のフランス人講師6名の方と、フランス人学生エリーズ・バルス・シャルリエ氏にインフォーマントになって頂いた。貴重な時間を割いて、快く調査に協力して下さい。ことに対しこの場を借りて心から感謝したい。

作例を3段階で評価して頂いた場合、(*), (?), (O)はそれぞれ、(non acceptable), (douteux), (pas acceptable)を意味する。

5段階で評価して頂いた場合、(—), (—), (O), (+), (++)はそれぞれ、(pas naturel du tout), (peu naturel), (moyennement naturel), (naturel), (très naturel)を意味する。またこうした記号の横に書いてあるa-gの文字は、便宜上各インフォーマントの方を示している。

***) 本文中で用いた省略記号は次の通りである。

H: HATCHER (1944)

R: ROTHENBERG (1979)

S II: SANDFELD (1965)

T II, T III: TOGBY (1982), (1983)

1) 3つの構文以外にも次のような現在(もしくは過去)分詞による構文, en train de + INF による構文も可能である。

⑤ Je l'ai vue pleurant.

(59) Je l'ai vue en train de pleurer.

しかし、これらの構文はインフォーマント調査の際、文体的な理由で容認されないことが多かったため本稿では考察の対象から除外した。

- 2) RADFORD (1975), PREBENSEN (1982), KLEIBER (1988)など。
- 3) 英語の知覚動詞がとる INF 節と現在分詞節の表す意味の違いをアスペクトによって説明しようとする主張に対して、DECLERCK (1981)や KIRSNER & THOMPSON (1976)も同様の批判を行なっている。
- 4) この用語については、2章の冒頭で説明する。
- 5) CROFT (1990)なども同様の観点をとる。
- 6) こうした分析に対して、例文(2), (3)で que 節をとる voir は知覚動詞というよりは「わかる」という意味の認識動詞であり、INF 節や関係節を支配する知覚動詞 voir とは別の語彙項目である。故に3つの構文は異なる動詞の補文というそもそも異なる環境に現われているのだから、これらと比較すること自体意味がないという反論があるかもしれない。しかし、SWEETSER (1990)によれば、多くの印欧語で認識、感情、好悪などの内的プロセスは視覚、聴覚、触覚、味覚などの具体的な経験を表すのと同じ語彙で表現され、特に知的な認識は視覚を表す語彙で表現される傾向が顕著である。また幼児が認識に関わるカテゴリーの区別を行なうときに視覚による経験が重要な役割を果たすこと、また話者が伝達する情報がどういう経路で得られたかを形態によって明示的に区別する、いわゆる evidentiality というカテゴリーを持つ多くの言語で、直接視覚による経験が認識の最も信頼できる証拠として扱われていることを考慮に入れると、視覚を表す語彙が知的認識も意味することは充分動機づけられていると言える。したがって、例文(2), (3)で3種類の異なる補文を支配する voir を別々の語彙項目ではなく多義語、それも多義の間に密接な関連のある多義語であるとみなし、3つの構文が現われている環境は同じだとすることは充分根拠のあることだと思われる。
- 7) だが、例文(12), (13)は、que 節について仮説(10)と矛盾する結果を示している。しかし、次に見るように、que 節の SN2 や SV2 が直接知覚されない例は多い。

(60) Il ne voit pas que l'érotisme sublimé le conduit naturellement vers Dieu. (T III : 142)

(61) et j'ai été heureuse de voir que le public [...] l'appréciait comme moi. (T III : 142)

従って我々は、仮説と調査結果のこの齟齬は何らかの要因が介入したためであり、仮説(10)自体は修正する必要はないと考える。

- 8) RUWET (1984)は、この意味的制約は、自分(SN1)の自分(SN2)に対する関係が自分(SN1)の他人(SN2)に対する関係と同じになった時、中和されると指摘している。この点に関して、我々のインフォーマントの一人が興味深い指摘を行なっている。彼によれば、SN1 が鏡などの媒介物を通して自分の姿を見ると、関係節の容認度はかなり上昇する。

(62) (?) Debout devant la glace, il se voit qui fait la grimace.

- 9) HATCHER (1944)の指摘によれば、INF 節を支配する voir は意味が直接的知覚からやや抽象化して、que 節を支配する voir に近い意味を表すことがある。こうした意味の拡張は関係節を支配する voir には見られない。

(63) Cela me fait de la peine...de vous voir vous dessaisir...d'une somme aussi conséquente (H : 398)

(64) Je m'attristais d'abord de la voir renoncer au piano et à la lecture.(ibid.398)

(65) A-t-on jamais vu un patron comprendre un domestique? (T III : 89)

この現象は確かに仮説(10)に反する。しかし、INF 節の SN2 は直接知覚される必要がないのに対して関係節ではそれが義務的であること、そして出来事の知覚は一般にものの知覚よりも漠然としていることを考えれば、INF 節を伴う voirの方が関係節を伴う voir よりも容易に意味が抽象化するだろう

という予測がたてられる。そう考えれば、この現象も原則的には仮説(10)を支持することになる。

- 10) 以下命題が「真である」とは、それが表す出来事が言語外の世界で実際に起こることを意味する。
- 11) ここで言う前提とは、談話の文脈と関係し、分裂文などの特定の統語構造で問題になる統語的・談話的前提ではなく、特定の動詞の語彙項目に固有の語彙前提である。語彙前提の例を挙げれば、例えば英語の bachelor の意味は、前提 male adult と断定 unmarried からなり、否定や疑問は普通断定の unmarried のほうにかかる。
- 12) 名詞句補文、動詞句補文という分類を始めたのは ROSENBAUM (1967)であるが、彼は英語の that 節はすべて名詞句補文と考えている。それに対し KIPARSKY&KIPARSKY (1970)は、表層では同じ that 節のなかにこの2つの種類のものが混在していると主張している。
- 13) 「語彙的主要部をもつ名詞句に支配されている文の中に含まれている要素は、変形によってその名詞句の外へ動かされてはならない。」(ROSS 1967)
- 14) KIPARSKY&KIPARSKY (1970)によれば対格+(to)不定詞は主語繰り上げにより派生された構文である。
- 15) しかし、3つの補文について、テスト(IV)~(VII)を使って(itとsoの競合はフランス語では中性代名詞leとçaの使い分けと関係すると思われる)情報構造上の違いを探ることは興味深い問題であり、次回の課題としたい。
- 16) 関係節補文がSV1の否定と共起しない理由は、次のように説明されている。«*puisque la construction [la relative] répond à une question sur ce que fait effectivement quelqu'un (ou son état) et dont l'interlocuteur a pu se rendre compte par lui-même.*»(ROTHENBERG1979: 368), «*Le locuteur n'étant pas en mesure de percevoir, il est inutile qu'il affirme ce qu'il ne perçoit pas, [...] Il s'en [de la relative] sert notamment pour décrire à la demande de l'interlocuteur ce qu'il perçoit au moment où il le perçoit.*»(BENZAKOUR 1984: 83)
- 17) 確かに否定以外でもSV1のモダリティー表現と関係節は共起しにくい、次のような用例も確認されている。
- (66) Tout le monde se tourna vers la porte. "L'entendez-vous qui craque?" (R:367)
- (67) Vois-le, pur et chaud, qui coule Comme le sang d'un beau cœur! (R:375)
- (68) Regarde-le qui cherche à entendre ce que je dis.(朝倉 1984:129)
- (69) Sa sœur, réveillée de son sommeil, put le voir qui s'était mis à genoux au pied du lit.(R:367)
- (70) Mais entres dans ton caveau. Et tu la [la vérité] verras sur l'heure Qui rit au bord du tonneau.(R:368)
- (71) Je vais le trouver, en bas, qui m'attend comme chaque matin.(R:368)
- そして、我々のインフォーマントたちは、SV1が単純未来である次のような環境でも、関係節をINF節と同程度に許容している。
- (72) Si on me demande où est la rivière, je pourrai répondre: «Encore quelques pas et vous la verrez serpenter entre deux collines.»
- (--)(-)(O)(+)b(++)acdefg
- Si on me demande où est la rivière, je pourrai répondre: «Encore quelques pas et vous la verrez qui serpente entre deux collines.»
- (--)(-)(O)(+)bdeg(++)acf
- このような現象を考慮に入れると、モダリティー表現と一律に言っても関係節との共起しにくさに違いがあるのではないかと思われるが、この問題については以後の課題としたい。
- 18) GIVÓN (1990)は、各種類の動詞ごとの2つの節が表す事行間の結びつきの強さの度合いを、各種類の下位クラスも考慮しながら次のようにまとめている。

MOST TIGHTLY INTEGRATED (SINGLE EVEVT)

(1)	M successful causation	(2)	M accomplishment
	A attempted manipulation		O attempt
	N weaker manipulation		D intent/obligation
	I preference/fear		A preference/fear
	P		L ability/know-how

(3)	C epistemic anxiety
	O epistemic certainty
	G edited citation
	N unedited citation

LEAST TIGHTLY INTEGRATED (SEPARATED EVEVT)

19) RUWET(1984), 曾我(1992)は, GIVÓN(1990)と同様の観点から, フランス語の認識動詞・使役動詞・モダリティ動詞の補文構造について論じている。ただし, 両者とも, SN1とSN2が同一指示でありながらINF節とque節が競合する場合に限って論じている。

20) que節では, SN1とSN2の同一指示が可能である。

(73) Il a enfin vu qu'il s'était trompé.

しかし, スケール(56)でque節は関係節より下位に位置しているのだから, 距離の iconicity によればque節は関係節以上に同一指示の表現としては不適当なはずで, 矛盾しているように思われるかもしれない。しかし, 関係節で表される出来事はINF節によるものと同じく他の意味的要因(a), (b)によって, 主節の出来事と意味的結びつきが更に強くなっている。一方que節で表される出来事は, たとえ意味的要因(e)によって主節の出来事と意味的結びつきが強くなったとしても, その時は必ず意味的要因(a), (b)がこれを弱めることによっていわば要因(e)の効果を中和する。これは上の例にも当てはまる。従って, que節でSN1とSN2の同一指示が可能なのは, 必ずしも矛盾ではない。

21) 補文内の要素の解釈・判断を, SN2と話者のどちらが行なうかに関わる, いわゆる透明な解釈と不透明な解釈の問題について, インフォーマント調査によって次のような結果が得られた。

(74) Tous ces jours-là, Paul voyait sa future femme lire un livre sur un banc, mais il ne savait pas qu'il l'épouserait 6 mois après.

(*) (?) (O)abcdeg

Tous ces jours-là, Paul voyait sa future femme qui lisait un livre sur un banc, mais il ne savait pas qu'il l'épouserait 6 mois après.

(*) (?)a (O)bcdeg

* Tous ces jours-là, Paul voyait que sa future femme lisait un livre sur un banc, mais il ne savait pas qu'il l'épouserait 6 mois après.

(*)abcdg (?)e (O)

(75) Tous ces jours-là, Paul voyait une de ses sœurs jouer avec sa future femme, mais alors il ne savait pas qu'il l'épouserait 10 ans après.

(--)(-) (O) (+)abcd (++)efg

? Tous ces jours-là, Paul voyait une de ses sœurs qui jouait avec sa future femme, mais alors il ne savait pas qu'il l'épouserait 10 ans après.

(--)(-)(-)d (-)e (O)bg (+)acf (++)

- * Tous ces jours-là, Paul voyait qu'une de ses sœurs jouait avec *sa future femme*, mais alors il ne savait pas qu'il l'épouserait 10 ans après.
 (--) (-)abdf (O) (+)ce (++)g
- (76) Tous ces jours-là, Paul voyait Marie travailler avec *son futur mari*, mais alors il ne savait pas qu'ils se marieraient 6 mois après.
 (--) (-) (O) (+)abcd (++)efg
 ? Tous ces jours-là, Paul voyait Marie qui travaillait avec *son futur mari*, mais alors il ne savait pas qu'ils se marieraient 6 mois après.
 (--) (-)a (O)bg (+)cdef (++)
- * Tous ces jours-là, Paul voyait que Marie travaillait avec *son futur mari*, mais alors il ne savait pas qu'ils se marieraient 6 mois après.
 (--)e (-)abdf (O)c (+) (++)g
- (77) Le Tahitien vit l'Européen *prier*, mais la signification de ce geste lui échappait.
 ?/ * Le Tahitien vit l'Européen qui *priaît*, mais la signification de ce geste lui échappait.
 * Le Tahitien vit que l'Européen *priaît*, mais la signification de ce geste lui échappait.
- (78) Le touriste français vit un japonais *lui faire signe d'approcher*, d'un geste de la main, mais il crut qu'on lui demandait de s'éloigner.
 ? Le touriste français vit un japonais qui *lui faisait signe d'approcher*, d'un geste de la main, mais il crut qu'on lui demandait de s'éloigner.
 * Le touriste français vit qu'un japonais *lui faisait signe d'approcher*, d'un geste de la main, mais il crut qu'on lui demandait de s'éloigner.
- (79) Dans son délire, le malade vit *son chien noir* voler au-dessus de l'immeuble. Mais en fait, c'était *un corbeau*.
 (*) (?) (O)abcdefg
 Dans son délire, le malade vit *son chien noir* qui volait au-dessus de l'immeuble. Mais en fait, c'était *un corbeau*.
 (*) (?)a (O)bcdefg
 ?* Dans son délire, le malade vit que *son chien noir* volait au-dessus de l'immeuble. Mais en fait, c'était *un corbeau*.
 (*)acdf (?)b (O)eg
- (80) Dans son délire, le malade vit sa femme *étrangler* son chien. Mais en fait, elle ne faisait que le *caresser*.
 (*) (?) (O)abcdefg
 ? Dans son délire, le malade vit sa femme qui *étranglait* son chien. Mais en fait, elle ne faisait que le *caresser*.
 (*)c (?)adg (O)bef
 ?* Dans son délire, le malade vit que sa femme *étranglait* son chien. Mais en fait, elle ne faisait que le *caresser*.
 (*)acf (?)bd (O)eg
- (81) Le jeune homme vit le célèbre écrivain *lui répondre par une grimace*; mais en fait, il s'agissait d'une manifestation de la maladie qui emporterait le vieil homme bien des années plus tard.
 ? Le jeune homme vit le célèbre écrivain qui *lui répondait par une grimace*; mais en fait,

il s'agissait d'une manifestation de la maladie qui emporterait le vieil homme bien des années plus tard.

* Le jeune homme vit que le célèbre écrivain *lui répondait par une grimace* ; mais en fait, il s'agissait d'une manifestation de la maladie qui emporterait le vieil homme bien des années plus tard.

以上の結果から次の観察が導かれる。

	INF 節	関係節	que 節
SN2 の解釈	SN1	SN1	話者
SV2 の解釈	SN1	話者	話者

各構文間の違いは、補文標識の有無と位置という統語的側面と、解釈の責任範囲という意味的側面との iconic な関係を想定すれば、自然に説明できる。

参考文献

- 朝倉季雄, 『フランス文法事典』, 白水社, 1955, 『フランス文法メモ』, 白水社, 1984
- AUWERA J. VEN DER, ‹The predicative relatives of French perception verbs› in BOLKESTEIN A.-M. et alii (eds) *Predicates and Terms in Functional Grammar*, Dordrecht, Foris, 1985, p. 219-234
- BENZACOUR F. ‹Les relatives déictiques›, in KLEIBER G. *Recherches en pragmasémantique*, Klincksieck, 1984, p. 75-106
- CADIOT P. ‹Relatives et infinitives déictiques en français›, DRLAV 13, 1976, p. 1-64
- CROFT W. *Typology and universals*, Cambridge University Press, 1990
- CROFT W. *Syntactic Categories and Grammatical Relations*, The University of Chicago Press, 1991
- DECLERCK R. ‹On the Role of Progressive Aspect in non-finite perception verb complements›, *Grossa* 15, 1981, p. 83-114
- ERTESCHIK-SHIR N. & LAPPIN S. ‹Dominance and the functional explanation of Island phenomena›, *Theoretical Linguistics* vol. 6, no. 1, 1979, p. 43-86
- GEE J. ‹Comments on the paper by AKMAJIAN›, in CULICOVER P., WASON T. and AKMAJIAN A. (eds) *Formal Syntax*, New York : Academic Press, 1977, p. 461-481
- GIVÓN T. *Syntax : A Functional-Typological Introduction*, vol. 1,2, John Benjamins, 1984, 1990
- GROSS M. *Grammaire transformationnelle du français : syntaxe du verbe*, Larousse. 1968
- GROSS M. *Méthodes en syntaxe*, Herrmann, 1975
- HATCHER A. G. ‹Je le vois sourire ; Je le vois qui sourit ; Je le vois souriant›, *Modern Language Quarterly* 5, 1944, p. 275-301, 387-405
- HAIMAN J. *Natural Syntax : Iconicity and erosion*, Cambridge University Press. 1985
- 稲田俊明, 『補文の構造』, 大修館書店, 1989
- KARTTUNEN L. ‹Implicative verbs›, *Language* 47, 1971, p. 340-358
- KAYNE R. *French Syntax : the transformational cycle*, The MIT Press, 1975
- KIPARSKY P. & C. ‹Fact› in BIERWISCH M. and HEIDOLH K.(eds) *Progress in linguistics*, Mouton, 1970
- KIRSNER R. & THOMPSON S. ‹The role of pragmatic inference in Semantics : A study of sensory

- verb complements in English», *Glossa* 10 : 2, 1976, p. 200-240
- KLEIBER G. «Sur les relatives du type *Je le vois qui arrive*», *Travaux de Linguistique* 17, 1988, p. 89-115
- LAKOFF G. «Seeing» in *Women, Fire, and Dangerous Things*, The University of Chicago Press, 1987, p. 125-130
- LE BIDOIS G. & R. *Syntaxe du français moderne*, vol. II, Picard, 1935
- 中右実, 「文の構造と機能」, 『英語学体系5 意味論』, 大修館書店, 1983, p. 548-626
- PREBENSEN H. «La proposition relative dite attributive», *Revue Romane* XV II : 1, 1982, p. 89-117
- RADFORD A. «Pseudo-relatives and the Unity of Subject-raising», *Archivum Linguisticum* 6, 1975, p. 32-64
- ROTHENBERG M. «Les propositions relatives prédicatives et attributives ; problème de linguistique française», *Bulletin de la Société de linguistique de Paris* 74, 1979, p. 351-395
- RUWET N. «Je veux partir / * Je veux que je parte. A propos de la distribution des complétives à temps fini et des compléments à l'infinitif en français», *Cahiers de grammaire* 7, 1984, p. 76-138
- SANDBELD K. *Syntaxe du français contemporain* : II. *Les propositions subordonnées* 2^{ème} éds. Droz, 1965
- SCHWARTZE C. «Les constructions du type *Je le vois qui arrive*», in ROHRER C. et RUWET N. *Actes du Colloque Franco-Allemand de grammaire transformationnelle* t. 1, Tübingen : Niemeyer, 1974, p. 18-30
- 曾我佑介, 「フランス語における状況の表現法—構文・動詞・叙法の選択—」, 白水社, 1992
- SWEETSER E. *From etymology to pragmatics*, Cambridge University Press, 1990
- TOGEBY K. *Grammaire française*, vol. II, III, Copenhagen : Akademisk Forlag. 1982, 1983
- WILLEMS D. «Regarde voir : Les verbes de perception visuelle et la complémentation verbale», *Romanica Gandensia* XX, 1983, p. 147-158

引用出典

- Cours de français deuxième étape*, Linguaphone Institute, 1980
- Le chien jaune*, par SIMENON Georges, Paris : Presses Pocket, 1976